

〔第28回学術集会 シンポジウムII〕

臨床現場の看護師と共同で行う事例研究の経験から

新潟青陵大学

柄澤 清美

「ケアの意味を見つめる事例研究」の方法論を用いる一事例研究は、臨床現場の臨機応変なケアに潜む「実践知」を掘り起こし、言語化して共有可能にする取り組みであり、実践を「為した人」と「共に意味を見つめ表現を助ける人」との、率直かつ丁寧な「対話」によって分析が進められる。

その経験を振り返ると、「フラットな関係で思うことを率直に言い合う」、「行った実践を思考も含めて言語化（時には図示して可視化）する」、「お互いのフィーリングやニュアンスを晒していく」という対話によって、間主観的な理解が促進されていた。

熟練看護師は、日々、目の前のニーズに対応しながら、ときに困難を切り拓きながら、ふさわしい援助を創造している。しかし、そのほとんどは、十分

に認識されないまま通り過ぎるように消えていく。共同研究者の素朴で率直な問いかけにより、はじめて熟練看護師の無意識下は掘り起こされ、質問者にわからせようとする努力がリフレクションを喚起し、実践の意図や意味を端的に表す言葉を選んだり作ったりしながらの語りを引き出し、それを確かめるための対話が続く。このプロセスを経て、研究グループは「そこにあった実践について看護師同士が共に謎解きする」ような関係になっていく。

このようにして、一事例の実践に含まれる普遍的な「実践知」を発掘していくのは、現場発の看護学構築に向けた試みとして、知的好奇心を満たす経験でもあった。

生活ビッグデータを活用した生活機能が変化し続ける 家族システムのエンパワメント支援

東京工業大学

西田 佳史

人生100年時代の到来にともない、多様な生活機能を持った人が共存していくダイバーシティ社会の構築が求められている。対象となる人を「家族」というシステムまで広げてみると、家族の構成員は、被子育て時期、妊娠・出産・子育て時期、介護時期、被介護時期などに属しているため、家族は、各構成員の多様な生活機能変化に対応することが求められる。しかし、この対応を、家族の努力の問題と帰着させているのは、本来起こるべき大きなイノベーションを通じた本質的な社会的解決には至らない。

一方、近年、生活にかかわるデータや人工知能をはじめとするデータサイエンスの道具が整備されてきており、生活リスクを体系的に扱うための準備が整いつつある。しかし、家族が抱える困難な生活状

況に関するデータは、学術分野でも、一般の生活者にとっても、ほとんど知られていない。また、家族が抱えている課題の解決に関しても、一部の行政、研究者の間で、消費者問題、事故・虐待の問題、介護の問題、認知症の問題と分断されて扱われている現状にあり、家族システムを支えるための技術体系・社会体系の構築が強く求められている。

本講演では、日常生活での安全の問題を取り上げ、ビッグデータを活用して生活問題の全体像を捉えるための試みや、リビングラボを活用して個々の生活の詳細像を捉えるための試みなど、現在利用可能になっているデータサイエンスの一端を紹介し、データを活用した生活リスク評価に基づく新たな家族エンパワメントの展望を述べた。